

賢治原稿の秘密

——《落書き／花壇設計／肖像画》

平澤 信 一

一九三三年九月二十一日、三十七歳の若さで没した宮沢賢治の書き遺したものを、断簡零墨に至るまで収録した『校本宮沢賢治全集』（筑摩書房）が完結したのは一九七七年十月。詩人の天沢退二郎と入沢康夫による未公開草稿の目くるめく紹介は、それまで伝記中心だった宮沢賢治研究を、テキスト研究へと一気に導いたのだった。その後、童話の断片や詩稿、書簡などが新たに幾つか見付かり、一九九五年五月から二〇〇九年三月にかけては、それらを含む『新校本宮沢賢治全集』（同）も刊行されたが、一九七〇年代当時、明らかにされた宮沢賢治の全体像を揺るがすような新たな発見は未だ為されていない。宮沢賢治の発見者であり、賢治没直後刊行の文庫堂版『宮沢賢治全集』をはじめとする各種の賢治全集に関わってきた詩人の草野心平は、校本全集の内容見本で〈賢治死後、いつの間にか四十年も

経ったが、今後もその業績は広く深く読まれるだろう。けれどもう巻を改めての全集の上梓は必要ない。それ程今回のは完璧〉であるとまで述べていたのである。

だが、宮沢賢治の書き遺したものを、断簡零墨に至るまで収録した『校本宮沢賢治全集』にも、その限界がなかったわけではない。手帳やノートなど写真版が数多く収められたものも勿論あり、また各巻の巻頭には、テキスト読解上、重要と思われる原稿の写真版が二十数枚ずつ掲載されているが、基本的な原稿の現状は、文字記号によって採録されたのである。

本論は、そうした全集の本文では伝えることのできない、宮沢賢治の原稿上の落書きに注目したものだ。いわば賢治原稿の最後の秘密を解き明かそうとする試みの始まりと言ってよい。例えば、一九二三年から二六年頃に成立したとみられる童話



図1

「黄いろのトマト」。貨幣というものを知らず、サーカスを観ようとして、黄金の替わりに黄色のトマトの実を差し出し、トマトを投げつけられ、拒絶されるペムベルとネリという《かあいそう》な兄妹の話、博物館の剥製の蜂雀が語るこの物語の表紙の裏側には〈左方に向けて何かを追いかけて行くような妖怪(?)の戯画〉(新校本全集校異篇)が描かれている(図1)。何の意味があるのか? それとも「偶然、そこに描かれてある」だけののだろうか?

『MEMO FLOORA』ノートは、宮沢賢治が独居自耕の羅須地人協会時代、花壇設計のために用いたものである。よく知られた「Tearful eye (涙ぐむ眼)」には、ブラキコーメの藍



図2

と白で黒眼と白眼、瞳はパンジーという指示が書き込まれている(図2)。短篇梗概「花壇工作」において《おれ》は《花で Beethoven の Fantasy を作ることもできる》と語るが、賢治にとって花壇設計は、童話創作と少しも変わらぬ大切な仕事だった。文字だけでは決して伝わらないこの表象にも、彼の創意は、一心に傾けられていたのだ。

姪のフジをスケッチした数少ない人物画がある(図3)。《日本里長のまなむすめ》が登場する文語詩「巨豚」下書稿の裏面



図3

に描かれたものだ。フジは、賢治の妹クニの娘で、身体が弱かった。「雨ニモマケズ」が記されていることで知られる手帳には、

この夜半おどろきさめ

耳をすまして西の階下を聴けば

あ、またあの児が咳しては泣きまた咳しては泣いて居ります

その母のしづかに教へなだめる声は

合間合間に絶えずきこえます

あの室は寒い室でございます

昼は日が射さず

夜は風が床下から床板のすき間をくぐり

昭和三年の十二月私があ室で急性肺炎になりましたとき

新婚のあの子の父母は

私にこの日照る広いじぶんらの室を与へ

じぶんらはその暗い私の四月病んだ室へ入って行つたので

す

そしてその二月あの子はあすこで生まれました

あの子は女の子にしては心強く

凡そ倒れたり落ちたりそんなことでは泣きませんでした

私が去年から病やうやく癒え

朝顔を作り菊を作れば

あの子もいっしょに水をやり

時には蓄ある枝もきつたりいたしました

この九月の末私はふた、び

東京で病み

向ふで骨にならうと覚悟してゐましたが

こたびも父母の情けに帰って来れば

あの子は門に立つて笑つて迎へ

また梯子からお久しぶりでごあんすと声をたえだえ叫びま

した

あ、いま熱とあへぎのために

心をと、のへるすべを知らず

それでもいつかの晩は

わがないもやと云ってねむってましたが

今夜はただただ咳き泣くばかりでございます

あ、大梵天王こよひはしたなくも

こゝろみだれてあなたに訴へ奉ります

あの子は三つではございますが

直立して合掌し

法華の首題も唱へました

如何なる前世の非にもあれ

ただかの病かの痛苦をば私にうつし賜はらんこと

と自らの痛みと引き換えに姪を苦しみから救って欲しいと願う賢治の姿が刻まれている。絵の日付は、一九三三年八月三十日。賢治が亡くなるわずか二十日ほど前のスケッチである。

また、時間は遡るが、小柳学が注目するように、賢治が東京で遺書（一九三一年九月二十一日）を書いた頃の落書きもある。文語詩未定稿「敗れし少年の歌へる」の余白に描かれた怪鳥(?)である(図4)。

「敗れし少年の歌へる」(下書稿の②段階)を引用しておく。

①「ひかりわななくあけぞらに

清麗サフィアのさまなして

きみにたぐへるかの惑星ほしの

いま融け行くぞかなしけれ」

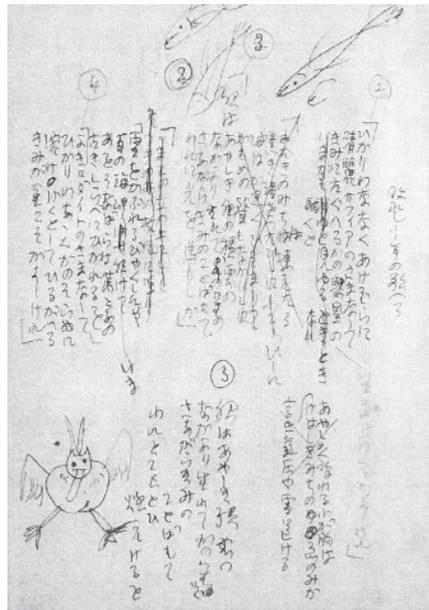


図4

②「夜はあやしき積雲の

なかより生れてかの星の

さながらきみのことばもて

われに光を送りしか」

③「いまこの丘の上にして

老つきの枝風に鳴り

雪をかぶれるびやくしんや

百の海岬いま明けて

あをうなばらは万葉の

古きしらべにひかれるを」

④「よきロダイトのさまなして

ひかりわな、くかのそらに

溶け行くとしてひるがへる

きみが星こそかなしけれ」

落書きは、詩集「春と修羅 第二集」や文語詩稿の余白に多い。賢治の推敲が、ただひとつの完成に向かうのではなく、『唯推敲の現状を以てその時々『定稿』』としていたことについては、すでに天沢退二郎、入沢康夫らの指摘があるが、それぞれの定稿は口語詩から文語詩へ、あるいは、第P形態の童話からの第Q形態の童話へと変転し、原稿上では、裏面も含めて複数のテキストが同居していたのである。生前、出版された心象スケッチ『春と修羅』の「小岩井農場」など、印象的な長詩で知られる宮沢賢治だが、晩年は凝縮された文語詩を書いた。「春と修羅 第二集」にも最晩年まで手入れが繰り返されていた。「春と修羅 第二集」の「七三 有明」下書稿(三)の上から墨で描かれた巨大な猫の顔は(図5)、賢治自身の自画像とも言われるが、賢治にはなぜか猫のスケッチが多い。これも晩年に書かれた童話『七口弾きのゴシシュ』で最初の晩に現れるのは、三毛猫だが、ゴシシュにいきなり「印度の虎狩」を聞かされたその猫の動きの目まぐるしいこと。



図5

猫はしばらく首をまげて聞いておりましたがいきなりパチパチバチツツと眼をしたかと思ふとぱつと扉の方へ飛びのきました。そしていきなりどんと扉へからだをぶつつけました。が扉はあきませんでした。猫はさあこれはもう一生一代の失敗をしたといふ風にあわてだして眼や額からはちばちば花を出しました。するとこんどは口のひげからも鼻からも出ましたから猫はくすぐったがつてしばらくくしゃみをするやうな顔をしてそれからまたさあかうしてはゐられないぞといふやうにはせあるきだしました。ゴシシュはすっかり面白くなつてますます勢よくやり出しました。

猫はくるしがってはねあがってはまはったり壁にからだをくつつけたりしましたが壁についたあとはしばらく青くひかるのでした。しまひは猫はまるで風車のやうにぐるぐるぐるぐるゴーシュをまはりました。

賢治が遺したノートには、萩谷由喜子も指摘するように、『西洋音楽講座』（一九二五年八月）所収の平井保三「ヴィオロン・セロ科」を抜粋筆写したのも見られるが、この《壁についたあと》こそ、宮沢賢治の遺したオリジナルのスケッチに違いない。それは《青く》光りながら、原稿用紙のあちこちで光を放ち続けている。

* 本稿は、宮沢賢治学会福山セミナー（二〇一六・一一・二一）での研究発表用原稿に補筆したものである。

* なお、本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究C）「宮沢賢治の草稿生成論的研究——『風の又三郎』を中心に……」課題番号25570258）による研究成果の一部である。